

御用意には、先六波羅を攻られん紛に山へ行幸ありて、かしこへ兵共をめして、山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべしと定られければ、彼法親王達尊も、其御心して坂本に待聞え給ひけれど、今はか様に事違ぬればあひなしとて、俄に道をかへて奈良の京へぞ赴せ給ふ、中務の宮尊も御馬にて追て参り給ふ、九條わたり迄御車にて、夫よりみかども假の御ぞにやのれさせ給ひて、御馬にたてまつる程、こはいかにしつる事ぞと、夢の心ちしておぼさる、御供に按察大納言公敏、萬里小路中納言藤房、源中納言具行、四條中納言隆資など参れり、何れもあやしき姿に紛らはして、くらき道をたどりおはする程、げにやみのうつゝのこゝちして、我にもあらぬさまなり、丑みつばかりに木幡山を過させ給ふ、いとむくつけし、木津といふわたりに御馬とめて、東南院の僧正の許へ御消息遣す、それより御輿を参らせたるに奉りて、奈良へおはしまし著ぬ、爰に中一日ありて、廿七日和束の鷲峰山へ行幸ありけれども、そこもさるべくやなかりけん、笠置寺といふ山寺へ入せ給ひぬ、所のさまたやすく人の通ひぬべき様もなく、よろしかるべしとて木の丸殿の構を始らる、是よりぞ人々少し心ちとりまづめて、近き國々の兵など召に遣す、中東の夷ども、漸く攻上る由聞ゆ、元より京にある武士共も我先にと競ひ参る、木の丸殿にはさこそいへむね、しき者もなし、いかに成行べきにかどいと物心細くおぼし亂る、中既に東武士共、雲霞の勢をたなびき上る由聞ゆれば、笠置にもいみじう覺し騒ぐ、元よりいとけはしき山の深きつゝらをりを、えもいはす木戸逆も木石弓などいふことゝもまた、めらる、ざりともたやすくは破れじと頼ませ給へるに、後の山より御敵くづれ参りて、木戸ども焼拂ひ、おはしますあたり近く既に烟も懸りければ、今はいかゞせんにて、怪しき御姿にやつれてたどり出させ給ふ、座主の法親王、尊御手を引たてまつり給へるも、いとほかなげなる御有様なり、中務の御子、尊大塔の宮、尊などは、兼てよりこゝを出させ給ひて、楠が館におはしましけり、行